

地域・保護者・行政・学校の4輪駆動で小学校を存続させよう！

萩市立佐々並小学校
校長 船木 美弘

佐々並のキセキ

～奇跡から軌跡（あしあと）へ～

3回実施した佐々並小学校と住まいの見学会の成果報告！

休校か学校存続か？

令和2年4月に萩市立佐々並小学校に着任した。児童数は16人、地域に未就学児がゼロで次年度から入学児童がなく、令和8年度に休校になるという実情が目の前にあった。

佐々並は江戸時代、萩城と三田尻を結ぶ「萩往還」の宿場町として栄えた地域である。江戸期から昭和期までに建てられた重要伝統的建造物群保存地区であり、歴史風情のある町並みが自慢の地域である。昭和30年代の佐々並小学校は児童数が約400人で、佐々並中学校や山口農業高校佐々並分校もあったのが、今は保育園も休園になり、教育機関は佐々並小学校のみである。

このままでは、本当に休校になってしまう。ここから私の得意としている「ひらめき」の花が咲き始めた。周りの人は「ひらめき」ではなく、「思いつき」や「無茶振り」だと感じているかもしれない。しかし、佐々並小学校に残された時間は本当に少ない。これまで光市立浅江小学校や下関市立熊野小学校で管理職として学校運営や地域連携を通して磨いてきた「ひらめき」で、**児童数確保を目指した「佐々並のキセキ」がスタート**することになった。約1年間で4家族14人のうち子ども7人の移住が決まったキセキの物語である。

佐々並小学校 今後の児童数の推移							
	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8
1年	2	1	1	1	2	1	休校0人 →6人
2年	2	2	1	1	1	2	
3年	3	2	2	1	1	1	※明木小 →6人
4年	3	3	2+1	2	1	1	
5年	3	3	3	2+1	2	1	※旭中 →21人
6年	3	3	3	3	2+1	2	
合計	16	14	13	11	10	8	
学級数	3	3	4	4	4	3	※特支含む

※赤字は移住定住で児童数が増えた学年
合計7人増加



4家族14人

今春移住家族（宇部市）
（1年生・年少）



うち子ども7人の移住が決定！

来春移住家族（山口市）
（新4年生・新1年生）



来春移住家族（宇部市）
（新年長・新年少）

☆埼玉県からも移住が決まる！ ☆令和7年度まで新入生確保！他に県外1家族と相談中！

学校キャラの誕生！

「学校キャラ」の効果は抜群である。

まず児童に「学校や地域の自慢をイラストにしてみよう」と呼びかける。応募作品は、学校や故郷への思いや願いが込められた自慢がいっぱいあった。それらの中で自慢の多かった内容をイラスト数点をうまく組み合わせて原案を作り、イラストレーターに構成を依頼してデータ化した。愛称も同時に募集、どの学校も「愛」という言葉が人気で、校名とマッチングした愛称になった。児童は自ら作った学校キャラを喜び、大事にすることで、仲間や学校、地域への関心が深まっている。

早速缶バッジにして児童や地域の方に配付し、地域でも大きな話題となって愛着が深まり、双方向のつながりも増した。浅江小はニシガマグクと虹ヶ浜海岸の「あさLOVE」、熊野小は地名と合唱クラブの活躍（音符）の「あいKUMA」、佐々並小は佐々並豆腐と豊かな自然の「ささラブ」が完成した。また、他の部品一つ一つにもしっかり自慢が表現されている。



学校や地域への関心が深まっていく流れの中で、**学校存続の機関車となる「ささラブ応援隊」が結成**され、期待の地域連携の活動が始まることになった。

学校存続の願い

「地域の学校はずっと続いてほしい」

これは地域全員の願いである。けれども少子化の波はどこも同じで、特に小規模校は深刻で、入学児童がゼロになる厳しさもある。

先日、休校になった学校の地域の方から「こうなる前に何かできることがあったのでは」という話を聞いた。「休校」を目の当たりにした多くの方がそう思い、だれが何から始め、何ができるのか不明のまま時間だけが過ぎて休校になってしまうのだろうか。2020年10月に学校と保護者の懇談を実施。母校が続いてほしいという保護者の切実な思いとともに、学校と保護者だけでは到底解決できないことも実感した。

それならば地域と行政と一緒に対応していこう、「ささラブ応援隊」の発足を提案。そして**保護者、地域、行政そして学校の「4輪駆動」の学校存続活動**が始まった。活動が始まった途端、この時を待っていたように地域全体が大きく動き出した。新入生確保が大きな目標、小学校だけでなく住まいの紹介や地域の魅力も発信していく見学会を計画。実施はなんと2カ月後の2月27日、夜に何度も熟議を行い、全員で知恵やアイデアを出し合って計画を練った。**「今しかできない、今やらないと」**大人の本気に火がついた。



第1回見学会の実施

「移住希望の家族の参加があるだろうか？」

見学会の企画段階で全員が感じていたことだった。前例のない活動で全くあてもなかった。

とにかく今できることをやろう。印刷会社に勤める保護者がプロ仕様のポスターとチラシを製作。保護者が手分けして市内外のスーパーやコンビニにポスターを張り、山口市の主な公営住宅一軒一軒にチラシを届けた。地域の情報紙や新聞、佐々並出身のタレント出演のテレビ番組でも紹介され、それらの効果があり、7組の応募があった。地域の方が「**直接支援はできないけど、家で作った佐々並産の野菜など提供できるよ**」早速地域での呼びかけが始まり、前日までに新鮮な野菜と200kgを超える佐々並米が、温かい応援の言葉と共に学校に届いた。たくさんの届け物に一番喜んだのは児童だった。自分達が地域の方にとって大事な存在であることを感じたのだろう。

見学会当日は、複式学習や特色であるオンライン授業の公開、児童による佐々並の魅力紹介、市のバスで住まいの見学と観光案内、佐々並産プレゼントを行った。なんと3組の家族から移住の希望があり、家族にマッチする住まい探しが始まった。**待望の新入生は、その家族の中にいた。**



楽しいイベント



住まいの見学



佐々並出身タレントのテレビ番組で紹介



参加子育て家族7組！3組の移住希望あり！

可能性は無限！

宇部市からの移住希望家族の住まいは、急で空き家は間に合わず、行政の方の配慮ですぐに公営住宅の入居が可能、待望の新入生入学が決まった。この驚きのニュースは、地域みんなの大きな喜びと話題になった。

「**佐々並のキセキ**」が現実に起こったことで、さらに学校存続活動が盛り上がっていった。その後、計3回実施し



た「佐々並小学校と住まいの見学会」で、**4家族14人うち7人の子どもの移住**が決まった。予想以上であった。

地域の関心や支援も増え、3回目の見学会では、たくさんの野菜と250kgの佐々並米が学校に届けられた。

ネットの「**移住スカウトサービス**」も活用して全国に情報を発信。北海道、神奈川、埼玉、鹿児島などから移住の問い合わせがあり、うまく縁がつながり埼玉からの移住が決まった。他の家族とも相談中であり、コロナ後の大きな手段である。

また、県内3校の小学校の保護者から活動の相談があり学校視察も行われた。学校存続は多くの学校で課題である。「佐々並のキセキ」を起点にネットワークでつながり、連携・協働していくために、いつでも学校視察を受けている。

可能性は無限である。ピンチはチャンス！動けば何かが変わることを信じて。



第3回佐々並小学校と住まいの見学会



みんなで受付



歴史文化探索



お土産付き楽しいゲーム大会



授業公開（ふるさと学習）



児童による学校紹介



お米250kg



地域の方が「直接支援はできないけど、家で作った佐々並産の野菜など、参加者のお土産として提供できるよ」早速地域での呼びかけが始まり、前日までに新鮮な野菜と250kgを超える佐々並米が、温かい応援の言葉と共に学校に届いた。